山陰万葉を歩く会

第５号

平成 27 年

7 月 1 日発行

江津万葉フェス
人麻呂の世界に浸る

県西部にゆかりの深い歌聖・柿本人麻呂の魅力を探る「万葉フェスティバルｉｎ石見」（山陰万葉を歩く会などが主催）が３月１日、江津市嘉久志町の地場産業振興センターであった。学術的な講演やトークショーのほか、地元児童による万葉集収録の「石見相聞歌」の朗唱、万葉衣装のファッションショーがあった。３月２日は、人麻呂ゆかりの地を巡るバスツアーも行われた。県内外の愛好家約２５０人が集まったフェスティバルの様子を写真で紹介する。

【山陰中央新報社平成27年３月４日（水）の記事（写真は会から提供）】

高角小学校生徒の「石見相聞歌」朗唱

内田賢徳氏
村尾靖子氏
藤岡大拙氏による

ファッションショー出演者一同

江津で万葉フェス
学識当時トップクラス
人麻呂実像 内田氏（国語学者）が講演

島根県の石見地方にゆかりの深い歌聖、柿本人麻呂の魅力に迫るイベント「万葉フェスティバルｉｎ石見」が１日、江津市嘉久志町の地場産業振興センターであった。国語学者で京都大学名誉教授の内田賢徳氏＝雲南市大東町出身＝の講演などを通して、来場者約２５０人が謎の多い人麻呂の実像に思いを巡らせた。

人麻呂は約１３００年前、官吏として石見国に赴任。同国での妻・依羅娘子との別れなどを詠んだ和歌が、奈良時代の歌集「万葉集」に収録されている。

内田氏は人麻呂の学識をテーマに語り、万葉集には本来の意味に関係なく漢字で日本語を表記した万葉仮名が使われている、と説明。その上で、人麻呂の「しぐれが降り、いとしい人に会いに行けず、一日が暮れようとしている」という内容の歌で、しぐれが「為暮」と表記されている点などに注目。人麻呂が漢字の意味を知った上で使い、豊かな歌の世界を築いたと指摘した。

さらに、同時代に生き、漢字・漢文に通じていたとされる古事記の編者・太安万呂と比較し「人麻呂の学識は当時トップクラス。漢字に対する知識は、太安万呂に匹敵していただろう」と推察した。

イベントは、山陰万葉を歩く会（川島芙美子会長）などが主催。内田氏、川島会長、作家の村尾靖子氏、ＮＰＯ法人出雲学研究所（出雲市）の藤岡大拙理事長の４氏によるトークショーもあった。

【山陰中央新報社による平成27年３月２日（日）の記事（写真は会から提供）】

演題「人麻呂の学識は古事記の述作者に匹敵する」

益田・グラントワ創作オペラ「ヒト・マル」市民の熱演 魅了

万葉歌人・柿本人麻呂を題材にした石見初の本格創作オペラ「ヒト・マル」が15日、益田市の島根県芸術文化センター・グラントワで上演された。２０１５年10月に開館10周年を迎えるのを前に、同館のしまね文化振興財団が初めて企画。日本を代表するオペラ歌手と公募で選ばれた地元の出演者が熱演し、満席となる１３５０人の観客を魅了した。

ヒト・マルは、石見地方にゆかりの深い柿本人麻呂から着想を得た主人公ヒトマロが、時の権力者の追っ手を振り払って過去と未来を自由に行き来する奇想天外なストーリー。創作オペラに定評がある加藤直さん（72）が脚本・演出を手掛けるなど、一流のメンバーが制作に関わった。

ヒトマロ役の腰越満美さん（49）や島根県奥出雲町出身の糸賀修平さん（34）ら国内外で活躍する４人のソリストと、合唱や舞踊を担当する公募市民25人に加え、グラントワ合唱団のメンバーなど総勢１２０人が出演。それぞれが、楽士の演奏に合わせて15章に編成された物語を情感たっぷりに表現した。

【山陰中央新報社平成27年２月16日（月）の記事】

【コラム】

しまね海洋館アクアスで豊かな海に恵まれたしまねを体感していただくゾーンです。石見万葉の磯から日本海までを紹介、新たな魅力に触れながら身近な海への理解を深めてください！

石見万葉の磯を復元
石見の磯にすむ身近な生物達を楽しもう

「叶う旅」レポート

益田市観光交流課　中島　光太郎

益田市では、歌聖柿本人麿を活用した交流人口拡大を目的に、平成26年７月に、市内の万葉関連団体で組織する〝うた神の国　益田〟観光推進委員会（アドバイザー・川島芙美子会長）を設立した。

本会では、島根県の観光素材造成事業支援補助金を活用し、平成26年11月に「第１回　柿本人麿公顕彰全国短歌大会」を開催。（「山陰万葉を歩く会」会報第４号で報告済）この度、同補助金を活用した第２段の企画である「叶うたび」を平成27年３月25～26日にかけて実施した。

本会では「人麿・万葉を活用した新たなターゲット層の掘り起こし」を目的の一つとしており、「叶うたび」では広島方面の女性にターゲットをしぼることとした。また、ただ人麿ゆかりの地を周遊するのではなく、人麿が歌を詠みたくなるほどの石見の地、その人麿の言葉の力が宿る石見を巡ることで〝願いを叶えるお手伝いをするというストーリー〟を描き、高津柿本神社ではその言葉（願い）を形にし、願掛け（＝奉納）をするという体験要素も組み込んだ。その他、温泉津の清水大師寺での「瞑想体験」、三隅の石州和紙会館での「紙すき体験」をしながら「石見地方」を東から西へ周遊していただいた。

参加者は10名（途中参加含む）と広報活動の不足を反省したが、アンケート結果を見ると参加者の満足度は高かった。

参加者からの声で印象に残ったのは、「願いを叶えるお手伝いをしてくれようとしているのが分かった」という意見であった。一方、「事前に資料をもらって、そのことが分かっていればなお良かった」との声もあり、参加者にあらかじめツアーの趣旨を十分に理解してもらうことでさらに満足度が向上したのではないかとも感じた。

このことは、今回のように人麿をテーマとした企画に限るものではなく、「石見地方」への誘客を考えた際に共通して言えることであり、旅行者の方に、「石見」のイメージや地域の魅力をストーリー化して発信することで、誘客の促進につながり、さらに、満足度の向上につながるのではないかと感じた。

平成26年度の取り組みとして、上記のように様々、試験的に新たな取り組みを行った。

平成27年度以降は、各事業の反省を踏まえた事業を継続して実施したいと考えている。

山陰のモンサンミッシェル衣毘須神社

石見と人麿
～川島会長の講演から思うこと～

益田市柿本人麿公顕彰会　会員　永田　賢治

去る３月７日（土）、「益田市柿本人麿公顕彰会」の研修講演会で、「山陰万葉を歩く会」の川島芙美子会長に、「人麿の謎『水底の歌』の周辺を探る」と題してご講演いただきました。「なぜ、人麿は石見に来たのか」という問いに対して、大陸・朝鮮半島に近い「石見の風土」が中央から見ても重要な地だったことを指摘されました。さらに、人麿の「石見相聞歌」中の言葉についても、「石見の風土」と一体化した味わい深さがあることに言及されました。

石見の「玉藻なす」海の美しさ。「玉藻なす寄り寝し妹」が「夏草の思ひ萎えて偲ふらむ」の面影。波に寄り来る海藻がからみつくように、寄り添って寝た妻への慕情。「しのふ（しのぶ）」は、「しぐれ」のイメージと重なる言葉。石見には、人麿が表現したすばらしいものが現実にあるのに、なぜ、発信になりえないのか。石見だけでは無理があり、山陰に広げ、つなげてすると効果的。――自然と一体化した表現の味わいとともに、問題提起と見解が示され、「石見と人麿」のとらえ方や発信のあり方について考えさせられました。

『水底の歌』（梅原猛著）を通して、人麿のすごさに気づかされる」として、その周辺を語るお話の中で興味深く思ったことがあります。一つは、人麿の柿本氏は渡来系の古い豪族「和爾氏」の流れをくむ一族だということです。益田市戸田柿本神社の「人麿七体像」に、渡来系の語り部の姿を感じたことが脳裏を巡りました。人麿の学識の深さと言葉の想像力は、朝鮮半島や大陸の文化にも精通した語り部の広い視野に裏打ちされていたのではないでしょうか。

もう一つは、藤原京を背景にした政治情勢と人麿との関係です。皇位継承の犠牲者と、律令体制の確立、藤原氏の権力掌握の渦中で、言葉を駆使して歌った人麿の挽歌（鎮魂歌）に、どんな思いが秘められているのか。時代の情勢や権力者への抗いの思いか、人の世の無常への思いか。その心境を勝手に想像しながら、お話を聴かせていただきました。

山陰に関わりのある万葉歌人として、石見の人麿の他に門部王（出雲）、山上憶良（伯耆）、大伴家持（因幡）がいることを指摘されました。いずれも人麿と深い関係のある人物と思われますが、具体的なお話を聴けなかったのは残念でした。またの機会のお話を楽しみにしたいと思います。いろいろな気づきと学びを与えていただき、ありがとうございました。

「理事会」を開催して

山陰万葉を歩く会事務局　大石　勤

２月７日、米子コンベンションセンターにおいて、「山陰万葉を歩く会」の理事会を初めて開催しました。

本会は、平成25年９月の設立以来、「万葉フェスティバルｉｎＩＷＡＭＩ」の開催や山陰万葉地図・機関紙などの発行、会員の募集など多くの活動を川島会長の指導のもと、各役員のご意見を伺いながら行ってきました。しかしながら、副会長や理事等の役員が会の名称のごとく山陰両県の各地に点在し、なかなか集まる機会を持てず、今回初めての開催となったところです。

川島会長、木谷副会長をはじめ５名の理事と２名の監事、そして私を含む事務局２名の総勢11名で、これまでの事業報告や入会状況、今後の会としての方向性などを確認しました。

意見交換では、奈良県との双方向の交流の促進や早期の情報発信の強化、また足元を固めるための島根・鳥取の交流の促進など、多くの建設的な意見が出されました。

各出席者は、これまで無報酬のうえ、旅費等も十分支給されない中で、「山陰の万葉」を何とか全国区にしたいという思いで本会の活動を支えていただいています。今後も、「入会して良かった」と会員の皆様に喜んでいただけるよう出来る限り頑張りますので、一層のご指導・ご支援をお願いいたします。

【編集後記】

●万葉食・江津市の短歌教室は次回でご紹介致します。お楽しみに！

●大伴家持大賞（問合せ：因幡万葉歴史館、締切：７月31日）、山上憶良短歌賞（問合せ：倉吉市立図書館、募集期間：10月１日～11月29日）があり、来年度は山上憶良赴任千三百年祭が倉吉で大々的に行われます。

【山陰万葉を歩く会】

問合せは江津市役所商工観光課・入会申込書や情報などは島根県立万葉公園のホームページです。

ファッションショーに出演して思ったこと

山陰万葉を歩く会会員・麻呂の会
会員　深野　富夫

『憶良らは今は罷らむ子泣くらむ それその母も吾を待つらむぞ』

私が演じた山上憶良が宴よりそろそろ帰ろうとする時に詠まれた歌です。このとき山上憶良は60歳～70歳の老人で、宴会を先に帰ってしまう気まずさをとっさの機転を働かせたジョークともいわれています。

さて、山上憶良とは一体どんな人物だったのでしょう。

彼は奈良時代初期の貴族・歌人で、七〇二年に遣唐使として唐に渡り、儒教や仏教など最新の学問を研鑽しています。これらの思想に傾倒していたことから、死や貧、老、病などといったものに敏感で、かつ社会的な矛盾を鋭く観察していたようです。代表的な歌に「貧窮問答歌」、「子を思ふ歌」などがあります。「万葉集」には78首が撰ばれており、大伴家持や柿本人麻呂、山部赤人らと共に奈良時代を代表する歌人として　高い評価が与えられています。

私自身、万葉集との出会いは高校時代、かの有名な犬養孝先生の講演が、竣工間もない高校の体育館であり、あの独特な犬養節で、柿本人麻呂の石見相聞歌を諳んじられたことが強烈な印象として残っています。これがきっかけで都野津町の柿本神社の境内に犬養孝先生揮毫の歌碑が全国で二番目に建立されました。

柿本神社には当時、樹齢八〇〇年以上ともいわれる立派な人麻呂の松がありましたが、残念ながら、平成二年の台風によって枝が折れ、専門家による手当もむなしくその後急速に衰え平成九（一九九七）年に伐採されました。今は二世が跡地に育てられています。

在りし日の人麻呂の松

江津の人麻呂を通し、また今度の寸劇での山上憶良、大伴家持などの有名な万葉歌人と接し、その上大きな声でその歌を歌ったことは大変感慨深いものがありました。昔からずっと歌い継がれてきたものは声を出して歌うべきだと思いました。

犬養孝先生が晩年江津に再来された折り、大きな声で、「石見相聞歌」を早口で何回もそらんじられたことを思い出しました。良い歌は耳に快い響きがし、いつまでも心に残ります。

「歴史とは現在と過去との絶え間ない対話である」（E・Hカー）を身をもって実感しました。

「万葉スポット巡り」に参加して

山陰万葉を歩く会
会員　土谷　和生

昨年は江津市を中心にしたものでしたが、今年は益田市に足を伸ばすとのことでしたので妻を誘って、今年も参加させていただきました。昨年もそうでしたが、今年も大変な歓迎をしていただきました。ありがとうございました。

先日、思いもしない原稿依頼がありました。私が書くようなことではないと思いましたが、二度も参加させて頂いたお礼にでもなればと思い書くことといたしました。

参加して改めて思うことは、「万葉集の魅力」と、「神として祀られた人麻呂の謎」の二つです。私が思う「万葉集の魅力」の一つは、その表記にあるように思います。万葉集に「よき人のよしとよくみて」という天武天皇の歌がありますが、万葉集は「よし・よき」を原文では「淑・芳・吉・良・四来」と書き分けて表記しています。まだその当時は大和言葉を漢字でどのように表記するのが良いのか試行錯誤の状態であったと思います。それだけにこの表記の相違には、作者の思いが籠った表記だと思います。改めて表記の大切さを思います。

第二巻の１３１の「石見の海」で始まる歌の「渡津の荒磯」も先生によって色々に訳されています。「渡津」の訳は折口信夫先生ですが、中西進先生は「和多津」、犬養孝先生は「和多豆」、ほかに「柔田津」とあるものもあります。読みも「わたつ」なのか「にぎたづ」なのか解釈によって違ってきます。第二巻の１３５の歌の「辛乃埼」も訳された先生によって「辛の崎」「唐の崎」「韓の崎」と違います。「唐」と「韓」ではずいぶん違った感じをうけてしまいます。何が正しいのかもちろん分かりませんが、どうでも良いというものでも無いように思います。

また、初めて訪れた戸田柿本神社のその神秘的な雰囲気に圧倒されました。なにがそう感じさせたのか分かりませんが、人麻呂の無念さを感じて帰りました。せっかく頂いた機会ですので、これからもすこしずつ勉強をさせて頂こうかと今思っているところです。感謝いたします。

益田市高津柿本神社にて

「万葉フェスティバル」の感想

山陰万葉を歩く会
会員　山本　倭子

川島芙美子会長の著書「人麻呂さん石見に生きて　恋して」を案内役に、ゆかりの地を順に巡りたいと思っていた矢先、「万葉フェスティバル　イン　イワミ」の案内が届き、嬉しく、即効申し込みました。当日の盛りだくさんの内容に驚きました。内田賢徳先生の「学識を持っていた人麻呂さんは、古事記も書けたのでは」のお話は衝撃でした。大谷香代子先生の冷泉流披講では、恥ずかしげもなく大きな声で朗唱し、雅びな雰囲気も味わうことができ、トークショーの「石見乙女に人麻呂さんはいつ惚れたのか」も、とてもおもしろく、このテーマについては未だに考えてしまいます。

舞台が次々と変わると、音が溢れ出し、エネルギーが溢れ、色彩が溢れました。人麻呂さんとの関わりを幼児から大学生、青年、市民と総べての年代を巻き込み、そして、その年代に合せたパフォーマンスに飽きることなく楽しむことができました。江津市さんは良い事をしておられる、取り組みが、企画が、素晴らしいと思いました。

二日目の「スポット巡り」では、若い美男子の人麻呂さん、依羅娘子さんに会え、時間に制限されながらのガイドさんの早足に、聞き洩らすまいと懸命について歩きながら、必ずまた来よう、来なくては、と強いおもいを持ったのでした。大好きな坂本信幸先生揮毫の歌碑もあったので、「笹の葉は、みやもさやに……」の先生の歌碑と共に写真も撮り、大満足。人麻呂さんの「石見相聞歌」は、凄いね、激しい恋、情熱的、よく聞きます。この度、その恋に浸り過ぎてしまったのでしょうか。

「韓の崎　高角山を巡り見て、人麻呂さんの恋に疲れぬ」恋にはくたびれましたが、とても充実した、「万葉フェスティバル　イン　イワミ」でした。お世話になった皆様に感謝しつつも、チャッカリと次の計画を楽しみにしております。ありがとうございました。

奈良県発着・万葉の旅リポート（3月1日～3月2日）

奈良S・G・Gクラブ（外国人対象ガイド）
会員　須藤千要子

「山陰万葉を歩く会」の川島芙美子会長からご案内を頂いた、「柿本人麻呂ゆかりの地を訪ねて」の１泊２日の旅で、島根県の江津市及び益田市の二市の観光協会と、地元ボランティアガイドの方々のお世話になり、様々な交流をして参りました。

朝８時ＪＲ奈良駅前を出発した車は、昼過ぎ江津市「万葉フェスティバル　イン　石見」会場に到着。竹かごに入った心づくしの「万葉弁当」を頂きながら、万葉衣装のイベントを拝見。地元でいかに人麻呂さんが慕われ、大切に語りつがれているか、を実感する。ミニコンサートでは、歌手の早苗ネネさんが、万葉の歌を様々なメロディにのせて、現代的な表現で披露されました。

「奈良からお客様がお越し頂いています」と会長にご紹介を頂き、今回の旅に参加された深田道さんから、ステージで「奈良及びＳＧＧクラブの事」を少しお話頂きました。このイベントは地元のＮＨＫテレビが撮影し、ニュースで一部が紹介されたそうです。

その夜、江津市有福温泉の神楽殿で見た「石見神楽」は圧巻でした。ヤマタノオロチの尾がひざをかすり、剣を手に舞う若者の息遣いが伝わる、臨場感あふれる体感の感動でした。

翌日は、「万葉スポットめぐり」で江津市内の高角山万葉公園、都野津柿本人麻呂神社など、午後からは、益田市内の高津柿本神社、戸田柿本神社などをそれぞれ地元ガイドの方に御案内頂きました。

島根と奈良は遠いですが、人麻呂さんが最も活躍されたのは持統天皇の御代であり、また出雲大社と桜井の大神神社の、共通の御祭神大国主命様のご縁もあり、色々と深いつながりがあることを、あらためて実感出来た旅となりました。

奈良S・G・Gクラブ顧問　深田　道（おさむ）

①外国人観光客のおもてなしに

昨年、私達が対応した外国人客数八万六千人の、15％は英語を公用語とした国から。後の75％の方にも英語でお応えしているが、この対話の端々に相手の母国語を織り交ぜることが出来れば親しみが湧き、新たなおもてなしになるのでは！この想い、夢に終わらせたくない。

②「万葉ＦＥＳＴＩＶＡＬ　ＩＮ　石見」へのお招き有難う

万葉の本を片手に現地を歩けると、軽い気持で訪れた石見。見つけ！「石見のや高角山の木の際より」の歌碑、灯台から見た海、前日歌った相聞歌、迫力ある神楽等々、石見のすべてに「万葉のいぶき」を感じた。文字通り「人麻呂さん、石見に生きて恋して」に同感。そして感謝。

万葉フェスティバル in 有福温泉

江津市観光ボランティアガイドの会
会長　岡本　悟

3月1日の「万葉フェスティバル　イン　石見」の興奮も冷めやらぬ中、夕方有福温泉の三階旅館で開催された「有志による打ち上げ懇親会」に参加しました。

早苗ネネさんや、奈良県から参加された皆さんの他、市内外の皆さんと川島芙美子会長、合わせて総勢20名ほどで、三階旅館の主人、自ら腕を振るった料理に舌鼓を打ちながらの酒席のなか、「万葉フェスティバル　イン　石見」の感想など、思い思いに語り合いました。

江津市は、万葉歌人「柿本人麻呂」とその妻、「依羅娘子」が詠んだ「石見相聞歌」の舞台として広く知られており、市内にはその二人の歌碑が6ヶ所あります。これは質、量ともに国内最高のレベルといえます。私はボランティアガイドとしてこの歌碑を含めたゆかりの地を、わかり易く説明することを心掛けています。2日目もバスにてガイドをさせていただきました。

ガイドの仕事にやりがいを感じる一方で、ガイドの依頼件数がなかなか増えず、相手の方へ適切に説明することの難しさや、自己満足に陥りやすい説明など、日々反省もしております。

懇親会のなかで、万葉の本場の奈良の方からの興味深い話、外国人にガイドをされている方の苦労話や、川島会長の造詣深い話、また市内で活動されている各団体さんの強い思いなど、様々な話を聞くことができました。万葉の世界は「とっつきにくい」と感じる方が多いと思いますが、ここでは専門知識なしで語り合う心地よさを感じることができました。その後の神楽殿での神楽も大変すばらしいものでした。

人麻呂の時代は、奈良から江津まで、1ヶ月弱かかる命がけの旅でした。「……我が振る袖を妹みつらむか」と歌った「人麻呂」と「依羅娘子」は、この高角山の別れが今生の別れとなったといわれます。今日では大和の国から石見の国へは、半日もあれば行ける距離になりました。人麻呂に会いに江津に来て頂いた皆さんに、何度でも足を運んでいただけるように、ボランティアガイドとして江津の良さを、真摯に伝えていきたいと思った一日でした。